

発達障がいのお子様向け

作業療法の手引き

当センターの作業療法では、発達障がいのお子様に対して、遊具や玩具など様々な作業活動を利用して発達を促します。ここでは開始にあたって実施の流れや内容についてご案内いたします。保護者の方へのご案内も含まれております。

▶ 実施の流れ

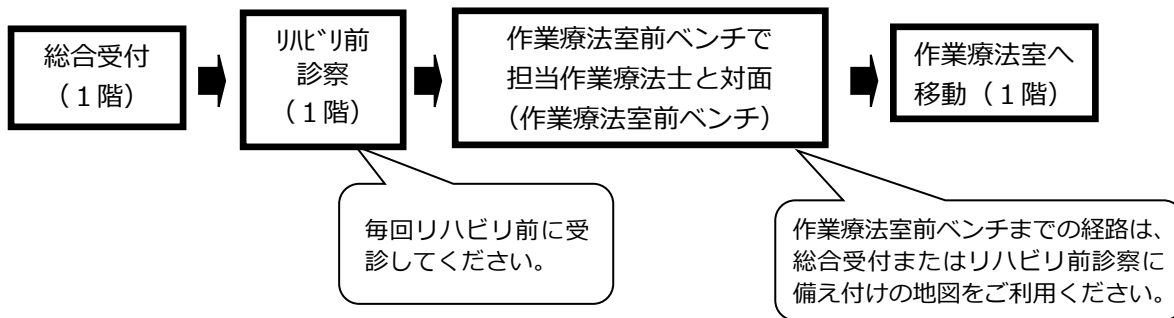
1) 医師の指示と予約

医師から作業療法の指示が出ますと、初回予約をお取りするため、担当作業療法士が電話連絡いたします。予約は時刻制ではなく、1限目から8限目までの時限でお取りします。詳細は次のとおりです。

	1限	2限	3限	4限	5限	6限	7限	8限
開始	8:50	9:40	10:30	11:20	13:30	14:20	15:10	16:00
終了	9:30	10:20	11:10	12:00	14:10	15:00	15:50	16:40

2) 初日

※担当作業療法士とスムーズに対面できるよう、待ち合わせ場所を決めております。



3) 定期診察と作業療法の継続

医師の指示に従って、定期的に診察を受けてください。ここでいう診察とは、予約制の診察であり、毎回のリハビリ前診察とは異なります。

作業療法の処方期限があり、作業療法の継続は、定期的な診察の中で医師が判断します。作業療法の処方が切れる前に定期診察の予約をお取りください。

4) 作業療法の予約

全て予約制となっております。予約の変更や取り消しは速やかに電話でお知らせください。

なお、当センターには体の不自由なお子様が入所あるいは通所されており、そうしたお子様の作業療法の合間に外来のお子様の作業療法を行っています。したがって、曜日や時間帯によっては予約の希望に添えない場合があります。

5) 兄弟・姉妹の同伴

同伴は構いませんが、リハビリ中の多動・衝動傾向があるお子様と同じ部屋で過ごすことになる場合もありますので、生後間もないお子様の同伴はできるだけご遠慮ください。また、同伴の兄弟・姉妹の方についても、他のお子様と衝突する事故の心配があります。作業療法室内で座って待機いただけない場合は、同伴をご遠慮ください。

リハビリ予約・変更電話番号：058-233-7277

▶作業療法プログラムのご案内



★★落ち着きがなく、注意・集中できにくい場合★★

感覚は脳の栄養と言われています。落ち着きがない一つの原因は、様々な感覚（見る・聞く・動く・触るなど）を感じ取りにくいことや、逆に感じすぎることであると言われています。そのため、注意・集中できにくくなり、落ち着くために、自らさまざまな感覚を取り込んだり、逆に回避したりすることがあります。

作業療法では、様々な遊具を使って、見る・聞く・動く・触るなどの感覚を味わってもらい、人や活動に注意を向ける下地を作ります。

★★他者の介入を避ける場合★★

感覚処理がスムーズにできないと、特定の感覚だけを楽しむ活動（ブランコ・トランポリン・音の出る玩具・光る玩具・回る玩具など）への関心が強くなり、年齢相応の遊び（三歳以降であれば、ままごとやルールのある遊びなど）や同年代のお子さんとの関わる遊びが少なくなりがちです。

さらに、触覚が過敏（識別よりも防衛的な触覚が優位）なお子様は、友達に少し体を触られただけでも不快に感じてしまい、人の輪の中に入らない場合もあります。

こうした状況が続くと、人よりも物との関わりを好み、人の介入を避ける場合があります。

作業療法では、そうした状況の要因を探り、人と関わることの楽しさを感じてもらえるように働きかけます。

★★新しい環境が苦手な場合★★

スケジュールを予測する、人の気持ちを推し量る、危険な結果を予測するなど、日常場面で不可欠な想像力が弱いお子様もいらっしゃいます。

こうしたお子様は、初めての場所に抵抗したり、作業療法の終了時刻を予測できず、終了に手間取ってしまったりします。

作業療法では、掲示板にスケジュールを絵も交えて表示したり、終了前に予告するなどの工夫をしています。



★★体の使い方がぎこちない場合★★

リズムに合わせてながら、あるいは、揺れながらボールを投げるなど、2つの行為を同時に行ってもらうことで、感覚の統合を促します。また、身体のイメージ形成を促す、全身バランス能力を高める要素を盛り込んだ活動を提供します。



★★手先が不器用な場合★★

脳での感覚処理がスムーズにできないと、指先の感覚（触る、指先で物の硬さを感じる）を十分に感じ取れず、指先を器用に使いづらくなります。

また、器用に使うためには手元を見続ける集中力、眼球のスムーズな動きも欠かせません。

作業療法では、まず手先が不器用な要因を探り、指先での識別力や眼球の動きを高める活動を提供します。



★★人への意識が弱い場合★★

人の区別ができにくい（初めての人にも平気で寄っていく、馴染みがない人の手を引く）お子様は、他者との物理的な距離が取れず、視覚的な気づきが弱いとも言えます。

作業療法では、お子様と作業療法士が同じ活動を行い（場面共有）、作業療法士との関係を理解できるように働きかけます。

★★座っている姿勢が崩れる場合★★

★★落ち着きがない場合★★

★★ボーッとしている場合★★

筋肉の緊張が弱く、関節の固定が不十分なお子様も見かけます。背すじを伸ばして、座ることが苦手で、足を動かしたり、机にもたれたりしているお子様もいらっしゃいます。床に寝そべってしまう場合もあります。

作業療法では、各種ブランコや遊具による揺れ刺激を使って一時的に全身筋肉の緊張を高める活動を導入しています。また、揺れ刺激は脳の覚醒を調整する働きがあり、刺激により落ち着いたり、逆にボーッとした状態から解放されることもあります。